時間と図式
―― ハイデガーの時間性に於ける問題

加　藤　恵　介

ハイデガーは講義『現象学の根本問題』に於いて，『存在と時間』で得られた現存在の時間性という構造から，存在一般の意味に至ろうとする。そこでは，存在への問いがその発端から含んでいた分裂が，より明瞭な形で現われている。我々はこれら二つのテクストから，存在の問いが伝統的な二分法との間にはらむ，一義的ではない関係を読みとる。二つの点が中心となる。

1）現存在は，「常に自らに先立っている」ものとして，現前から出発しては規定され得ない。しかし，ハイデガーが現存在の存在の意味として時間性の構造を図式的に記述するとき，彼は彼自身の規定による企投の根拠としての意味と，伝統的な二分法の項としての意味の間で揺らいでいる。この二分法が，彼のいう眼前存在者（Vorhandenes）の存在論と連関している限りで，彼の意味の規定における二義性は問題にされねばならない。

2）現存在の時間性に基づいて，他の存在者の存在の意味が求められる。このとき，現存在の自分への関係と他の存在者への関係の二分法的分離が，時間性の構造における二分法的分離に対応している。1）と同じく，この二分法的分離が問題になる。

I　時間性と図式

『存在と時間』では現存在（ここでは，そう呼ばれているのは人間という存在者である）の存在の意味は，時間性として規定されている。我々はまず時間性と呼ばれるものに至る過程をたどる。

現存在とは，充実した現前の内に留まっているのではなく，常に自らの「外に」いる。彼は常に既に自分に―先立って―おり（Sich-vorweg-sein），そのつど「彼が未だそれではない」ようなものである。現存在の，このような存在は関心（Sorge）と呼ばれる。求められているのは現存在の存在の意味，つまり関心の意味である。意味（Sinn）は，そこから現存在の理解（企投）が可能になっているような，理解の根拠，企投の向かう先（Woraufhin）として

規定される。「関心の意味への問いによって，関心の分節された構造全体の全体性をその展開された分節の統一性に関して，何が可能にしているのか，が問われている」。[1]

自分に先立っているとは具体的には「(世界内部で出会う存在者)のもとにあることとして，自らに先立って既に(世界)内にあること」<Sich-vorweg-schon-sein-in-(der-Welt-) als Sein-bei (innerweltlich begegnendem Seienden)>である。[2]この三つに分節された構造全体の統一性が何に基づいているか，問われることになる。

ところで，関心の構造は日常性の分析から出発して(不安という情態性に即して)得られたが，本来性と非本来性の対置に従えば日常性は非本来的である。ハイデガーは分析の根源性という基準を提出し，分析が根源的であるためには現存在の存在を，その本来性と全体性に於いて明らかにせねばならない，とする。現存在の本来的，全体的な存在として，死へと先駆する先駆的覚悟性(vorlaufende Entschlossenheit)が得られる。現存在の時間性は，この先駆的覚悟性の意味として求められる。ハイデガーの要求する分析の根源性は必ずしも明瞭でない規定であるが，[3]ここでは詳細に立入らずに時間性の規定へと進むことにする。求められているのは，先駆的覚悟性を可能にしているものである。これは三つの相をもつ。

まず将来が規定される。先駆的覚悟性とは，最固有で卓抜な存在可能(すなわち死の可能性)に関わっていること(Sein zum eigensten ausgezeichneten Seinkönnen)であり，これは一般に現存在がその最固有な可能性の内で自分に帰来(auf sich zukommen)し得，この自分を自分に帰来させること(sich auf sich zukommenlassen)の内でその可能性を可能性として保ち続けることによって可能となっている。「卓抜な可能性を保ちつつ，その可能性の内で自分を自分に帰来させること」[4]が根源的な将来(Zukunft)である。本来的であれ非本来的であれ現存在の死への存在は，現存在が常に自分に帰来(auf sich zukommen)していることによって可能になっており，自分に帰来することとしての将来は，従って本来性と非本来性に共通する構造であり，現存在は将来的(zukünftig)である。

また，先駆的覚悟性は自分の被投性を引き受けるが，それは将来的な現存在が，その最固有な「そのつど既にそうあったあり方」(wie es je schon war)つまり彼の既在(Gewesen)であり得ることによってのみ可能である。将来的である限りで現存在は既存であり，既存性は将来から生ずる。

また，先駆的覚悟性はそのつどの状況を，手許存在者を配慮する仕方で開示するが，これは存在者を現前化(Gegenwärtigen)することによって可能である。

既在し現前化する将来(gewesend-gegenwärtigende Zukunft)が時間性(Zeitlichkeit)である。これは本来的実存から得られたが，本来性と非本来性の双方に共通する構造で

ある。非本来性はその根底に可能的な本来性をもっている。

関心の構造＜Sich-vorweg-schon-sein-in（…）als Sein-bei（…）＞の統一性は時間性に基づいている。つまりSich-vorwegは将来に基づき，Schon-sein-inは既在性に，Sein-beiは現前化に基づいている，というのだがこれだけでは，将来と既在性と現前化がどのように統一的なのか，明らかではない。この点を知るために，ハイデガーの記述をたどることにする。

時間性とは根源的な「自分の－外に」（Auβer-sich）であり，将来，既在性，現前化（現在）という三つの脱自態（Ekstase）の統一に於いて時熟（sich-zeitigen）する。三つの脱自態には，それぞれどこに向って脱自がなされるか（Wohin）ということが属し，これらを地平的図式（Horizontales Schema）と呼ぶ。将来の図式は（現存在が自分自身のために実存しているという）「彼の－ため」（Umwillen-seiner）であり，既在性の図式は（被投的に）「何の前に（投げ込まれているか）」（Wovor）であり，現在の図式は，（道具連関の）「～するため」（Um-zu）である。「事実的現存在と共に，そのつど将来の地平に於いて或る存在可能性が企投されており，既在性の地平に於いて『既にあること』が開示されており，現在の地平に於いて配慮されたものが発見されている。」(5)三つの地平的図式の統一によって現存在の可能性のUm-willenと道具性のUm-zu連関が結びつき，世界が可能になっている。この統一は時間性の脱自的統一に基づき，時間性は全体としての地平（Horizont）をもっている。「時間性全体の地平が，事実的に実存する存在者がどこに向って（Woraufhin）本質上開示されているか，規定する」(6)。以上で，関心の構造を統一する意味としての時間性が，規定されたことになる。時間性の統一的な構造として「自分の－外に（Auβer-sich）」が示された。

要約しよう。「自分に－先立って－いる」現存在の存在（Sich-vorweg-sein），すなわち関心の構造は三つに分節されている。これを統一するものとしての時間性は，「自分の－外に」（Auβer-sich）として統一的であるが，三つに分節されている。この記述はいくつかの疑問をひきおこす。関心の構造が「自分に－先立つ（Sich-vorweg）」としてそれ自体統一的であるとき，どのような連関において，それをさらに統一するものとしての根拠－意味が要求されるのだろうか。たとえそれが関心自体の外や他者にではなく，関心自体のうちに求められるとしても，事情は変わらない。ここでは関心という構造の統一性の基礎づけが試みられている。一般に，基礎づけという概念自体の妥当性もまた，根源的と派生的という二分法とともに，問い直され，相対化される。しかし，もちろん当面問題になるのは，関心の構造全体の統一性が，ハイデガーのいう時間性の構造に基づいているか否かである。そしてこの点は明瞭ではない。

時間性の構造は，関心の三つの相に対応して，三つに分節されている。従って，時間性の三つの脱自態，すなわち将来，既在，現在の統一性が示されねばならない。これらを統一するのは，時間性の根源的な「自分の一外に（Auβer-sich）」である。しかし，ここで疑問が生じる。関心の「自分に一先立って」と時間性の「自分の一外に」は，いかなる点で異なっているのだろうか。メタフォリックなものを除いて両者が異ならないのなら，ハイデガーの述べる所とは逆に，時間性の三つの相の統一性は関心の構造によってしか保証されないことになる。しかし問題は，基礎づけの方向を逆にすることではない。

関心の「自分に一先立って」は現存在の存在を規定し，時間性の「自分の一外に」は現存在の存在の意味を規定する。「自分に一先立って」と「自分の一外に」の二つは，存在とその意味という二分法の前提のもとで，はじめて区別しうる。はたして，この二分法を前提することは可能だろうか。それは現存在の存在の分析から得られたのだろうか。ハイデガーが現存在の分析論から規定した意味とは，理解（企投）の根拠である。これらはどのように連関するのだろうか。対象と意味という伝統的二分法は，眼前存在者（Vorhandenes）の存在論を形成する。ハイデガーはこの二分法に従って，時間性の名称のもとで関心の構造を二重化しているのではないだろうか。

このことと連関して，もう一つの問題がある。現存在は「自分の一外に」「自分に一先立って」おり，彼の存在は充実した現前によっては捉え得ない。このような彼の存在が関心と呼ばれ，その統一的な構造が企投（理解）である。関心を基礎づけるものとして，ハイデガーは，将来，既在，現在という三つの脱自態と，各々の脱自態が向って行く先（地平的図式）を示す。将来，既在，現在から時間性とその統一を捉えるなら，おそらく伝統的な意味において，現前から時間を捉えることになるだろう。そうではなく，時間性の統一的な「自分の一外に」が先になくてはならず，そこから規定されるものとして，企投は現前に内在するのではない「自分に一先立つ」ものとなる。しかし，ここでは時間性の三つの相に対応するものとして三つの企投が考えられることになる。このとき企投は「自分に一先立つ」現存在の統一的な構造ではなく，現在＝現前の内に内在する現存在の行う，現在，過去，未来の対象化と異なる所がないのではないだろうか。意味の規定と連関して，理解＝企投の規定もまた，伝統的な理解概念との間で揺らぐのである。

このことは，時間性の規定だけではなく，時間性と世界性の連関を見るとき，よりはっきりとした形をとる。

ハイデガーは「常に既に自分の外に，世界内部の存在者の許にいる」現存在という規定によって，「主観と客観をまず設定した上で，両者の関係を求める」伝統的問題設定を免れてい

る。この限りで「世界の理解に於いて常に（現存在の）内ー存在が共に理解されており，実存それ自身の理解は常に世界についての理解である」。[7]他方でハイデガーは，自分の可能性への企投（理解）と，その他の存在者の世界性への企投（理解）を，それぞれ独立した企投（理解）とする。「現存在は常に既に『自身を超えて（über sich hinaus）』あるが，それは彼がそれであるのではないような他の存在者への関わり合いとしてではなく，彼自身がそれであるような存在可能性と関わり合っていることとしてである」。[8]

これらは両立するだろうか。理解を，現存在が「そのつど自分の可能性である」という統一的構造とみなすとき，「世界の理解」と「自分の理解」という二分法は成立するだろうか。また，世界が，世界内存在としての現存在を構成し，世界性＝指示性が，現存在の可能性によって規定されているとき，自分の可能性への企投と世界性への企投という二分法は成立するだろうか。

そして，この自己と他の企投の分離は，先に見た時間性の分離と結びついている。ハイデガーは既在しー現前化するー将来という分節された時間性の構造を，既在するー将来と現前化に二分し，既在するー将来を，現存在の自分の可能性への企投に，現前化を世界内部存在者の企投に結びつける。三つの脱自態の統一から離れて，企投は，時間性のある相に対応するものとして規定される。このとき企投は充実した現前ー現在に内在する主体と客体の間の関係になる。ここに於いて，主ー客の二分法と，現在による時間規定は，充実した現前から出発するものとして連関している。我々はこのことを『現象学の根本問題』に於いてテンポラリテートが問われるとき，さらに明瞭に見ることができる。つまりそこでは，次章で見るように，手許存在者との交渉に於けるその存在（手許性）の理解は，現前化（現在）のみによってなされ，そこでは将来や既在性はハイデガーの言に反して，いかなる役割も果たしていない。ちなみにハイデガーのいう本来的実存は，世界と他の存在者から切り離されたものではなく，従って本来的実存に於いても手許存在者との交渉が規定されねばならない。しかし手許存在者との交渉をおこなう現前化とは非本来的現在であり，本来的時間性に於いて現在は瞬間（Augenblick）として他の二つの脱自態の内に包み込まれてしまっており，従って他の存在者との交渉は必然的に非覚悟的に（unentschlossen 従って非本来的に）[9]なされねばならなくなる。このこともまた，上に見た分離と連関している。

我々は以上で，ハイデガーによる時間性の規定と，伝統的二分法との間の一義的でない連関を見た。このことは，現存在の時間性から存在一般の意味に至ろうとする『現象学の根本問題』に於いてさらに明らかになる。

Ⅱ　時間性とテンポラリテート

「我々は，本当に存在者の存在を時間から理解しているのか」。[10]

存在理解（Seinsverständnis）は，ある理解（Verstehen）である。何が理解そのもの（Verstehen als solches）を可能にしているか，問われる。理解とは，現存在の実存に於ける可能性への企投であり，現存在の存在体制（Seinsverfassung）に属している。現存在の存在体制は時間性に基づいている。企投一般，すなわち理解一般が，そして存在理解が時間性に基づいており，これによって可能になることが，示されねばならない。

さしあたりここで問題になるのは理解そのもの（Verstehen als solches）への一般化の是非である。理解（企投）とは，現存在の全体的な構造であり，客観に関わる主観の側の構造ではない。ハイデガーはここで理解を存在の理解や現存在という存在者の理解や他の存在者の理解に共通する一般的構造としての「理解そのもの」へと一般化し，存在理解を「理解そのもの」の一種と見なしている。理解は客観に関わる主観の側の構造となる。これは「存在と時間」の規定と両立するだろうか。

存在者の理解と存在理解はそれぞれが企投として層（Schichtung）をなすものとされている。[11] オントロギッシュなものはオンティッシュなものに対するメタ＝レヴェルと見なされていることになるが，このような階層構造を可能にしている制度は，伝統的な形而上学である。ハイデガーが「言葉への途上」で語るようにメタ言語とスプートニクとは形而上学なのである。[12] この時期のハイデガーによる伝統の破壊は，それ自体形而上学の制度に依存しているのだが，我々はこのことを単純に批判するわけではない。

我々はハイデガーの論述を辿ることにする。理解の時間的解釈において，

1）存在理解としてではなく，オンティッシュな実存的理解としての理解が，次いで

2）広義の眼前存在者（Vorhandenes）への態度が，それから

3）この態度に属している存在理解が，どのように時間性に基づいているか，問われる。[13]

ここでは現存在による自分の可能性の企投と，他の存在者の企投とが分けられ，さらに後者の内にこの存在者の存在の企投が求められることになる。このような企投の分離と階層化のもつ問題については，既に見た。我々はこの1）から3）までを辿ってみよう。

1）現存在の実存的理解が，本来的実存と非本来的実存に於いて，それぞれ時間性によって規定される。本来的実存は反復的－先駆（wiederholendes Vorlaufen）であり，その内に瞬間（Augenblick）が包み込まれている。他方，日常的な存在者との交渉における非本来的な実存は，世界内部でさしあたり出会われる存在者から自己を理解している。この非本来的な自己理解は，忘却しつつ－現前化する－予期（vergessend-gegenwärtigendes Gewärti-

gen) として規定される。

2) 次いで，本来的或いは非本来的な実存的理解ではなく，「手許存在者と眼前存在者という意味に於いて存在者を理解している存在理解」(14)が問われるが，その前に，そのような存在者との交渉が時間性に基づいていることが明らかにされる。

さしあたり出会われる存在者とは道具であり，これは単に眼前にある (vorhanden) のではなく，その存在とは第一次的には，道具連関に於ける道具機能である。このような存在者は手許存在者と呼ばれる。それらは，まず何か (たとえばハンマー) として存在してそれから道具機能をもつのではなく，その「何であるか」(Wassein) と「いかにあるか」(Wiesein) が，「～のための」(Um-zu) という連関そのもの (これが Bewandtnis と呼ばれる) なのである。我々が道具に出会うとき，我々は既に道具である存在者を Bewandtnis の連関に向って企投してしまっており，すなわちBewandtnisを先行的に理解している。(これがBewendenlassenと呼ばれる。たとえばWir lassen es beim Hämmern mit etwas bewenden.) このとき，我々は (道具が) 「何のためか」(Wozu) を予期 (Gewärtigen) している。また我々は「何に関して」Bewandtnis があるか (Womit) を保持 (Behalten) しており，これによってはじめて，道具を道具としてその連関に於いて理解する。Bewendenlassenとはこの保持しつつ予期すること (behaltendes Gewärtigen) であり，そこに於いて道具が現前化 (Gegenwärtigen) される。

こうして道具が，予期し－保持する－現前化 (gewärtigend-behaltendes Gegenwärtigen) に於いて出会うことが示された。道具との交渉の時間的体制が明らかにされ，道具との交渉が時間性によって可能になっていることが示されたことになる。

3) 道具との交渉に於ける時間性から，さらに根源的な時間性へとさかのぼらねばならない。存在者の存在の理解，すなわち手許存在者の手許性 (Zuhandenheit) や眼前存在者の眼前性 (Vorhandenheit) の理解が，時間性に基づいていることが示される。このことが示されるのは「テンポラリテート (Temporalität) と存在」と題された節(15)に於いてである。テンポラリテートとは，存在理解一般を可能にしている制約として，明示的 (ausdrücklich) に主題とされる限りでの時間性をいう。

ここでは，手許存在者の存在，すなわち手許性の理解が，それ自体一つの世界理解として，現存在の時間性に基づいていることが，示されねばならない。「我々はどのようにして手許性そのもの (Zuhandenheit als solche) を，時間的に理解しているか。」(16)

手許性とその欠如態である Abhandenheit はプレゼンツ (Praesenz) という根本現象の派生態である。プレゼンツは現在と連関しているが，現在と同一のものではない。プレゼンツ

とは，現在（現前化）という脱自態が，自らを超え出て（über sich hinaus）そこへ向かうような（Wohin）地平である。「現在はそれ自身に於いて，それ自身を脱自的にプレゼンツに向って企投する」。[17]現前化は，本来的なもの（瞬間）であれ，非本来的なものであれ，それが現前化するものを，プレゼンツに向って企投する。同様のことが，他の2つの脱自態，すなわち将来と既在性に関しても妥当する。

プレゼンツは手許存在者の手許性の理解を可能にしている制約である。全て手許存在者は「時間の内に」（in der Zeit）時間内部的に（innerzeitig）にある。それが「今，ある」とか「そのとき，あった」というように我々は言う。我々が手許存在者を時間内部的なものとみなすとき，我々はそれを既に手許性に於いて理解しているのであり，この手許性の理解はプレゼンツによって可能になっている。「現前化に於て出会う全てのものは，脱自態に於て既に外に出ている地平に基づいて，すなわちプレゼンツに基づいて，現前しているもの（Anwesendes）として，すなわち現前性に向って，理解されている。手許性と不手許性（Abhandenheit）が，現前性と非現前性（Abwesenheit）という程のことを，つまり，しかじかに変様した，または変様可能なプレゼンツを意味する限りで，世界内部で出会われる存在者の存在は，プレゼンツ的に，すなわち根本的にテンポラルに，企投されている。従って我々は存在を時間性の諸脱自態の根源的な地平的図式から理解している」。[18]

こうして，存在者の存在がプレゼンツに向って，すなわちテンポラリテートに向って企投されていることが示された，とされる。存在者の存在の理解は時間への企投であり，存在の意味は時間であることを，ハイデガーは示したことになるはずである。

以上で見た通り，ハイデガーの記述は，手許存在者－手許性の対置と現在－プレゼンツの対置を重ね合わせるに留っており，十分な論証はなされていない。従って我々はここから何らかの帰結を導くのではなく，我々の目にも明らかな問題を明らかにするに留めよう。

まず，ここでは手許存在者の存在の，つまり手許性の理解だけが解明されている。我々がさしあたり第一次的に出会う存在者とは，ただ端的に眼前にある（vorhanden）のではなく，既に道具連関の内にある手許存在者であり，この存在者の存在とはその手許性である。これは『存在と時間』に述べられたことと合致している。しかし『現象学の根本問題』に於いては，この点について動揺がある。つまりそこでは，現存在以外の存在者は広義に於いて眼前存在者と呼ばれる。すなわちそれは『存在と時間』に於ける手許存在者と眼前存在者の双方を含むわけだが，これは単なる用語法の拡大ではない。というのは，『現象学の根本問題』に於いて眼前存在者は（ただ人工物のみを例外として，）「我々がそれを発見しなくとも，すなわち我々の世界の内部で出会わなくとも，存在している」。[19]それらは現存在がいなくても，従って世界

がなくなっても，かわらず存在しており，ゆえにそれらの存在は現存在から独立しており，世界内部性とは別のものである。[20]従って手許存在者も含めて広義の眼前存在者について，その存在はその世界内部性（手許性や眼前性）とは別のものである。「時間性とテンポテリラート」[21]「テンポラリテートと存在」[22]の節でハイデガーは，手許存在者の存在を手許性と，眼前存在者の存在を眼前性と等置している。（それは『存在と時間』とは一致している。）しかし『現象学の根本問題』の，これに先立つ箇所では，手許性や眼前性は，存在者の存在とは別のものだったのであり，ハイデガーの論述はこの点で根本的に混乱している。

ところでハイデガーは「存在一般の意味」を求めねばならなかったのであり，現存在とその他の存在者を含む，一切の存在者を包括する無差別的（indifferent）な存在理解を想定している。[23]実際に彼が示したのは手許存在者の手許性そのものの理解であった。これは部分的な解決と言うべきものではなく，全く別のものと見るべきだろう。つまり，別の前提のもとにあるのだ。

また，我々は先に，関心の構造に対して時間性の構造を対置することの内に問題を見出した。同じことが，また現在とプレゼンツの対置に関しても言えるだろう。とりわけ，論述のなかで企投（理解）という概念の得る多義性が，許容しうるものか否かは，問題だろう。企投とはもともと「常に既に自分に先立っている」現存在の全体としての構造として，現前の内に捉え得ぬものであった。しかし「テンポラリテートと存在」の節に於いて，企投は現前化－現在のみに於いてなされるようなものとなっている。ハイデガー自身は，そこでは現前化が主導的（führend）であるのみで，他の２つの脱自態と切り離されているわけではない，と書く。[24]しかし，現前化と他の２つの脱自態との連関がいかなるものか示されていないし，たとえそれが示され得たとしても，企投が現前化－現在に対応し，他の２つの脱自態に各々別の企投が対応しているとされる以上，企投なるものが時間の３つの相にそれぞれ対応するものとして，元来の統一的構造と別のものになっていることは明らかだ。この点に於いてハイデガーは，伝統的な現前性－現在の優位のもとに企投の意味を変化させている。

ハイデガーは，現存在自身が時間である，と記す。[25]時間を「今」や現前によって求めることはできない。一方彼は現存在の時間性という名のもとにいくつかの図式を示してみせる。そして，図式は常に「今」と現前に奉仕するのである。

〔哲学　博士課程〕

註

(1) Martin Heidegger ; *Sein und Zeit* 14. Aufl.（以下ＳＺと略）S. 324

(2) S. Z. S. 192

(3) 形式的には「実存とは存在－可能を，従って本来的存在－可能をも意味する」。(S. Z. S. 233) しかし他方で，現存在は本質上常に既に頽落している。また，日常性の分析に於いて捉えられていたのが，ただ「非全体としての現存在の非本来的な存在のみ」(ibid.) であるというとき，ハイデガーの要求する全体性はいかなることを意味するのか。(現存在のSich-vorweg-sein は眼前存在者の未済ではなく，それ自体一つの統一的全体である。) 彼による根源性の要求はいかにして妥当性を得るだろうか。なおこの点に関しては，ハインリヒ・ヒューニー「良心の現象学」(『理想』1984年10月号) p. 408－410 参照。

なお，本来性なる規定そのものの，自己への近接性としての伝統への帰属については，今さら言うまでもなく Jacques Derrida ; ousia et gramme̅ in Marges...,pp. 73-4. 参照

(4) S. Z. S. 325

(5)(6) S. Z. S. 365

(7) S. Z. S. 146

(8) S. Z. S. 192

(9) Martin Heidegger ; WW. B. 24 *Die Grundprobleme der Phänomenologie* (以下 G. P. と略) S. 413

(10) G. P. S. 406

(11) G. P. S. 396 この比喩をハイデガーは「いかがわしいもの」とことわってはいるが，問題は比喩自体でなく，比喩によって記述される構造にある。

(12) Martin Heidegger ; *Unterwegs zur Sprache* 7. Aufl. S. 160.

(13) G. P. S. 405 f.

(14) G. P. S. 413

(15) G. P. S. 429 f f.

(16) G. P. S. 433

(17) G. P. S. 435

(18) G. P. S. 436

(19)(20) G. P. S. 240, 249

(21) G. P. S. 416

(22) e. g. G. P. S. 438

(23) G. P. S. 250, 396. 但し，この無差別的 (indifferent) という規定自体が問題を含んでいる。この点に関しては拙稿「存在の問いと外部」(『理想』1984年5月号) p. 205－6 参

照。

(24) G. P. S. 438

(25) Martin Heidegger ; WW. B. 20 *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs* S. 267

Zeit und Schema

Keisuke Kato

Heidegger versuchte in der Vorlesung "Die Grundprobleme der Phänomenologie" den Sinn von Sein überhaupt aus der Struktur der Zeitlichkeit des Daseins, die er in "Sein und Zeit" geklärt hatte, herauszustellen. In dieser Vorlesung kann man das zweideutige Verhältnis Heideggers zur traditionellen Dichotomie deutlich sehen. In der vorliegenden Arbeit sollte versucht werden, diese Zweideutigkeit zu erhellen.